

# 月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



特集

## 住民発！新しいまちづくりのカタチ

南三陸町復興推進ネットワークが実施する、わらすこ探検隊の一コマ

- まちの元気を生み出す“生きがい仕事” ③  
一般社団法人コミュニティスペースうみねこ（宮城県女川町）
- まちは豊かな資源に溢れている！  
伝え続けるまちの魅力 ⑤  
一般社団法人南三陸町復興推進ネットワーク（宮城県南三陸町）
- “美しい自然に人が集うまち”を目指して ⑦  
特定非営利活動法人越喜来の景観形成と住民交流を図る会  
（岩手県大船渡市）

☆ 専門家に聞く地域づくりのヒント ⑧  
（明治大学 理学工学部 教授 園田 真理子さん）

東北の元気⑨ ⑨  
ちぎり絵サークル（宮城県石巻市）

まちの仕組み⑩ ⑩  
避難長期化で「町外コミュニティ」整備へ（福島県浪江町）

支援員のための地域生活支援「困った」ときのQ&A⑪ ⑫

地域の希望を再生させよう【希望学】からのメッセージ⑬ ⑭  
（東京大学 社会科学研究所 教授 玄田 有史さん）

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮  
ひとりごと サポーターのあなたへ⑯  
（宮城県サポートセンター支援事務所 アドバイザー 浜上 章さん）

暮らしを支える支援員⑰ ⑰  
支援員を「卒業」した若者が福祉の道に（宮城県亘理町）

／ 住民発！ ／

# 新しいまちづくりのカタチ

東日本大震災後、  
私たちのまちは一瞬にして姿を変えてしまいました。  
月日の経過とともに、土地や建物、道路などは  
整備されていくかもしれませんが。  
けれども私たちの暮らしにたいせつなことって  
それだけじゃないですよね？

今回特集で紹介する3つの取り組みは  
暮らしを豊かにする  
新しいまちづくりの活動です。  
一歩先の未来を見据えた、住民発の活動を  
ご紹介します。







イチジクづくりに励む“パパちゃんズ”

**DATA**

一般社団法人  
コミュニティスペースすみねこ  
宮城県女川町高白浜 25-2  
TEL 090-6681-5450  
ゆめハウス  
営業時間：平日 11:00 ~ 14:00  
土日・祝日 11:00 ~ 15:00 (定休日・毎週木曜日)

## まちの元気を生み出す“生きがい仕事”

◎一般社団法人コミュニティスペースすみねこ（宮城県女川町）

### ポイント

1. 集える場所と仕事が、生きる活力につながります。
2. 長年培ってきた技術や知識を活かして、少しずつ収入を得る仕事づくりは、まちを活気づけます。

### 交流施設「ゆめハウス」

2014年5月、宮城県女川町高白浜地区に、交流施設「ゆめハウス」がオープンした。「いらっしゃい！」「どうぞ！座って！」出迎えてくれたのは、ゆめハウスで働く地元の女性たち。機敏に動く女性たちの指先から生まれるのは、愛情と真心がたつぷり詰まった。お母さんのごちそうだ。地元の住民や観光客も訪れ、みんなで大きな食卓を囲む形に。それはまるで家庭の食卓のよう。

女性たちにもともと調理や接客の仕事に就いていたのか聞いてみると、決してそうではないと言う。女性たちが出会い、ともに働くきっかけとなったのは、東日本大震災後に同町で行われた「布草履づくり」だった。

### 生かされるから

### 生きるへ

「必要だと思うことを必要ときにやる、その想いだけで駆け抜けてきました」。そう話すのは、ゆめハウスを運営する一般社団

法人コミュニティスペースすみねこの代表、八木純子さん。震災後、八木さんは多くの町民が生活していた避難所で、仲間たちとともに託児や物資の配布、高齢者の生活支援を実施していた。「活動を続けるなかで、物資に頼っているうちは生きているじゃなく、生かされている。なんじゃないか、生かされるではなく、生きる。にならないと！そんなふうを感じたんです。そのためにはコミュニティが形成できる場所と働くこと、この2つが必要だと思いました」そう話す、八木さん。

ちょうどその頃は、避難所から仮設住宅への転居がすすんでいた時期。慣れない仮設住宅での暮らしによって、部屋に閉じこもってしまう高齢者もいた。みんな楽しんでるようなきっかけや生きがいをつくれなにか、些細な金額でもいいから、お金につながるような仕組みをつくるのができれば。辿り着いたものが、支援物資として届いたものの余ってしまったTシャツを利用した布草履づ



一般社団法人コミュニティスペースうみねこ

代表 八木 純子さん

「これからは“生かされる”ではなく“生きる”にならないと。

そのためには、コミュニティ形成ができる場所と仕事が必要」



仕事を生み出す

くりだった。そうして始まった女性たちによる布草履づくり。仮設住宅に暮らす人だけでなく、在宅で被災した人たちにも声を掛け、50〜80歳の女性約60人が参加。完成した布草履は1足千円で八木さんが買い取り、お給料として女性たちに渡している。布草履の値段は二千円。残りの千円は活動費に充てている。「お母さんたちがつくれるのが、だいたい1日1足。年金暮らしの人も多いので、千円つけてっこう大きいんですよ。それに、頑張った分お金になるってやっぱりうれしいじゃないですか」と八木さん。仕事の日以外にもみんなまで出かけたり、お茶飲みを楽しんだりと交流を深めてきた女性たち。そんなとき、八木さんは女性たち同様、被災して職を失った男性たちの様子が気にかかった。男性に向けた、ほかの取り組みもできないか。2012年5月、男性たちの活躍の場として、畑・



笑顔いっぱいの女性たちがお出迎え

果樹園づくりが始まった。作業を担うのは、70歳代の男性3人。通称「パパちゃんズ」。高齢になっても作業に大きな負担がかからない唐辛子、ニンニク、イチジクを栽培している。元漁師の男性もおり、畑や果樹園づくりは慣れない作業・・・?と思いきや、そんなことはない。防鳥ネットをつくったときなどは、網を扱っていた漁師だからこそその手際の良さ。それぞれが長年培ってきた技術や知識を活かしながら、仕事に取り組んでいる。

生きがい仕事

生きる力となる『仕事』をつくり続けてきたコミュ

ニティスペースうみねこの取り組み。ゆめハウスで働く渡辺たけ子さんは、働くことで、生活に張り合いが生まれたと話す。「震災で仕事がなくなり、やる事がなくなることがすごく苦痛だったんです。ここで働くことになって、行くところが・働けるところができたのが、すごくうれしかった」と話す渡辺さん。実は渡辺さんの旦那さんは「パパちゃんズ」の一員。畑や農園はゆめハウスの敷地近くにあるため、一緒に通勤している。「まさか旦那と一日中一緒にいる日が来るとは思わなかったよ」。そう話す渡辺さんの顔は、なんだかうれしそう。



愛情たっぷりのランチは地元の食材を使用

現在ゆめハウスでは、60〜80歳代の女性約30人が交代で勤務しており、最高齢は86歳。「昨日は皿洗いと草取りを率先してやってくださったんです。無理せずいいんだよって話したら、『お日さまを浴びるのが気持ちいいし、こうやっているのが楽しいんだ』って。仕事を探すのがみんな上手なのよ」と、八木さん。全員が自分ができることを見つけて、できることを活かして働く。生活するため、生きるためのだけの仕事ではなく、「生きがい」にもなっている。

「こういったことから、だんだんまちが元気になっていくんじゃないかな」と、話す八木さん。楽しいだけでなく、仕事につなげることで生きる力になる。だからみんなキラキラ輝いている。ゆめハウスで出会った男性・女性の姿は、未来の女川町が、震災前よりも輝いたまちになることを予感させた。昔







## DATA

一般社団法人  
南三陸町復興推進ネットワーク

宮城県南三陸町志津川字天王山135

エコセンター内

TEL 0226-25-9350

FAX 0226-25-9360



サケの孵化を学ぶ子どもたち

## まちは豊かな資源に溢れている!伝え続けるまちの魅力

◎一般社団法人南三陸町復興推進ネットワーク（宮城県南三陸町）

### ポイント

1. 子どもたちに地元の魅力を伝えることで、故郷を誇りに思う気持ちが育ちます。
2. 地域住民は、誰もが「先生」になれるたいせつな人材!

### 放課後は地域を知る時間

「私たちが小学生くらいの頃は、放課後が地域を知る時間だった。授業が終わると地域に飛び出して、釣りをしたり、野球をしたり。今でも同級生が集まると、『あのときあんなことあったよな』って話が出て盛り上がるんです。子どもの頃はそれが当たり前だったから気づかなかったけど、あの時間って、本当に貴重だったんだなって今になって思います」。

そう話すのは、宮城県南三陸町で活動している一般社団法人南三陸町復興推進ネットワークの理事、及川涉さん。同法人が立ち上がったのは、2012年の3月。町内で活動する若手世代の勉強会やコミュニティづくり、地域に関する講習会など、多岐にわたる活動を続けてきた。現在メンバーは、20〜30歳代の若者8人。そのほとんどが同町の出身者だ。

### 思い出や経験のもつ意味

震災後、及川さんたちが

危惧したのは、子どもたちが自由にまちで遊ぶ時間がなくなること。震災により甚大な被害を受けた南三陸町。運動場や学校の校庭には仮設住宅が建設され、当然、暮らす場所もバラバラ。子どもたちの登下校はスクールバスが主に。同じ地区の友だちや先輩・後輩みんなが一緒になって地域を駆け巡る、そんな放課後の時間がすっぱり抜けてしまったのだ。

「子どもたちにとって、自分の生まれ育った地域を知るといことは、すごく大事なことです。私たちがそうだったので、就学や就職で一度町を出たとしても、戻ってきたと感じる気持ちや、たとえ戻らないとしても故郷を誇りに思う気持ち、そうした町に対する愛着がどこからくるのかといったら、それは子どものときの思い出や経験なんです」と、及川さん。だからこそ、次の世代を担う子どもたちにも、地域を知る機会をつくりたい。

そんなとき、ふと思い出したのは、南三陸町の合併前の一つである、旧志津川



## 一般社団法人南三陸町復興推進ネットワーク

### 理事 及川 渉さん

「復興には、まちに暮らす人の心や経験をしっかりと育てていくことが大事。10年、20年先のまちの姿に照準を定めた活動が必要だと思っています」



町教育委員会が1977年より実施していた「ふるさと学習会」、通称「ふる学」だった。

#### 経験を次世代へ

ふるさと学習会とは、町内の小学6年生を対象とし、地域の仕事や歴史、文化について実体験をおし、学んでもらう課外学習のようなもの。しかし、その活動は徐々に縮小し、数年前に廃止になっていた。ふる学があれば、子どもたちが地域を知る機会がつけられる。ふる学を経験した自分たちなら、同じことができるとは思わないか。

2012年6月、同法人と支援団体との共催で、新たな形のふる学がスタートした。

#### 地域の魅力を伝える

##### 「町民先生」

2013年9月には、名称を「南三陸町わらすこ探検隊」に変更。水産加工場での工場見学やキャンプ、市場の競り見学など、子どもたちがまちに触れる機会を次々とつくり出していった。



竹を割ってつくった皿で食べるカレーは格別！

た。昔のように学年関係なく遊ぶ機会が少なくなっているのを感じたため、対象も小学1年生～6年生までに拡大。毎月2、3回の頻度で開催しており、なかには50回を超える参加回数を超える子どももいる。

なによりおもしろいのは、地域住民が「町民先生」として子どもたちに地域の魅力を伝えていること。魚屋さんが「町民先生」だったときには、南三陸町の名産でもある「サケ」の生態をおし自然の恵みと過酷さを学習。その後、魚のおろし方を学び、最後にはサケの食べ比べを行った。「誰もが特技なり、自分の人生で培ったものがある。みんなが町民先生になり得るんです。たとえば

婦だったら、料理を教えることができるじゃないですか。講座の「ネタ」があまりすぎて困るくらいなんです。まちの資源が豊富すぎて」と、朗らかに笑う及川さん。時には企業の職員を招き、「企業先生」として実験や小さな職業体験を行うことも。企業先生による講座は、町内では触れることのない体験をする機会でもあり、子どもたちにたくさん刺激を与えている。

#### 一步先の未来を見据えて

子どもたちをはじめとした、地域住民がまちに愛着をもつきっかけをつくるだけでなく、町外の人が南三陸町に関心をもつ機会をつ



地元農家さんも驚くほど泥んこに

くり、町内への若者の流入を促進しようと、2014年4月には、町民有志とともに新しい活動を開始。町内の休耕田を利用し、自分たちで育てたお米でお酒をつくり交流する、「南三陸町おらほの酒づくりプロジェクト」だ。5月に行つた田んぼ整備では、町内外合わせ約30人が参加。次回田んぼらしを行うための準備段階だったこともあり、田んぼに飛び込む若者も。地元農家も、「こんなに田んぼに人が来たことないなあ」「40年50年田んぼしてつけど、田んぼで泳いでるやつ初めて見た」と大笑い。出身や年齢の垣根を越えた交流が随所に見られた。「時間が経てば建物や道路は完成していきます。でもそれだけでは復興とは言えない。そこに暮らす人の心や経験をしっかりと育てていくことが大事だと思うんです。10年、20年先のまちの姿に照準を定めた活動が必要だと思っています」と及川さん。南三陸町復興推進ネットワークの一步先の未来を見据えた活動は、これからも続く。官





代表の内藤善久さん。後ろでは羊たちがお散歩中

## DATA

特定非営利活動法人  
越喜来の景観形成と住民交流を図る会  
(略称：リグリーン)

岩手県大船渡市三陸町越喜来字肥の田 24-11  
TEL/FAX 0192-44-3411

## 「美しい自然に人が集うまち」を目指して

◎特定非営利活動法人越喜来の景観形成と住民交流を図る会(略称：リグリーン)(岩手県大船渡市)

### ポイント

1. 人が集う景観づくりは、心の復興につながります。

美しいまちの

未来を目指して

深い青色が広がるリア  
ス式海岸、濃い緑のグラ  
デーションが織りなされ  
る山々。そんな豊かな自然  
に囲まれた場所にあるの  
が、岩手県大船渡市三陸町  
の越喜来地区だ。美しい  
景色を満喫しながら車を  
走らせていると、「まさか  
ここに？」と驚いてしま  
う光景が視界に飛び込ん  
できた。羊だ。広々とした牧  
草地を羊たちが列をなし、  
ゆっくりと歩いている。  
もともとは牧草地ではな  
く、民家や田畑が立ち並  
んでいたこの場所。しかし、  
東日本大震災により景色  
は一変。すべてが一瞬にし  
て津波にのみ込まれてし  
まった。瓦礫撤去後、残っ  
たのは雑草と葎が生い茂  
る更地。

「荒廃したまちを目にす  
ることは、住民によるまち  
の復興の意欲を喪失させ  
てしまうのではないか」  
そう考え、動き出したの  
は越喜来に暮らす住民た  
ち。目指したのは、美しい  
自然に人が集う、そんなま  
ちの姿だ。

住民のつながりを再構築

交流するような機会が必要だと思いました」と、内藤さん。解決の糸口として同法人が見出したのは、前述のまちの景観づくりを市外から訪れているボランティアを含め、地域全体で取り組むこと。まちの景観づくりと住民同士のつながりの再構築、その二つの実現に向けた活動が始まった。

一歩一歩、確実に

そうした想いは、多くの人たちの賛同を得た。牧草地にするための土地も持ち主が快く承諾。東北農業研究センターの押部明徳さんや同県にある小岩井農場で羊の飼育を長年担当していた濱戸祥平さんがアドバイザーとして対応してくれることに。「たくさんの人たちの協力があつた。地域の人たちやボランティアさんのおかげ。本当にこの一言に尽きます」とうれしそうに目を細める内藤さん。

多くの人の力によって完成された牧草地には、現在5頭の羊が放牧。牧草地

への転換が困難な地帯には花壇を植栽。羊の飼育や羊毛を利用しての小物づくり、花壇の整備をきっかけに、年齢や暮らす場所と違った垣根を越えた交流が生まれていく。「交流と一言に言っても、簡単にできるものではありません。まだまだこれから。ゆっくりゆっくり」と内藤さん。活動を継続するうえでは当然課題もでてくる。浸水域である現在の場所は、防潮堤の造設などによって移転対象となる可能性があり、解決策を模索中だという。

そうした課題に向き合いながらも、思い描く美しいまちの未来を目指し、住民たちは今日も奮闘を続けている。



広々とした牧草地で草を食む羊たち

明治大学 理工学部 教授

園田 眞理子 (そのだ・まりこ)さん

工学博士・一級建築士。専門は建築計画学・住宅政策論。とくに高齢社会に対応した住宅・住環境計画について多数研究、政策提言などを行っている。中央建築士審査会委員、東京都住宅政策審議会委員、川崎市住宅政策審議会会長



専門家に聞く地域づくりのヒント！

ひねもす まちづくり、終日のたり、のたりかな

3年前のあの日、あの時を契機に、私たちはものごとの根本に立ち返って素直に考え直すことが求められています。人間といえども、宇宙や地球に存在が許された一つのパーツにしかすぎず、常に自分たちとそれ以外の環境との応答関係の中で生きているのです。その時に、頭だけで考えるのではなく、身体的な感覚で素直に正しいと感じること、自然に体が動くことをなすべきだと思います。

その気持ちで過去を振り返ってみると、20世紀の人口と若者が急増したあの沸き立つような時代は、スピード第一、人々があっと驚く新規性を求めて、次々に新しいまちをつくることにあまり違和感もありませんでした。しかし、そうしたやり方の限界はもはや明らかでした。

新しい時代のまちづくりとは、子どもや高齢者の身体性にもあつた、ゆっくりと着実なものでなければなりません。一過性でない継続性が求められます。新しいものを生むだけでなく、それを育てる日々の積み重ねと努力があるのです。そうすれば、新しい命が生まれ、元気に育ち、成熟し、やがて老い、次の世代にバトンを渡す循環が始まります。

そうした新しい時代にふさわしいまちづくりの試みが、三陸海岸で行われています。

① 耕し、手を動かし、ご馳走をいただく

女川町のまちづくりは、自分たちの手で生み出したものを介して美味しい食事と交流が生まれ、生きることを実感できる空間を生み出している。本当の仕事とは、人に役割と生きがいをもたらす。お金はそれについてくるご褒美である。

② わらすこと、おらほには未来がある

南三陸町の試みは、若者がわらしこ（子ども）に、自分たちのまちの魅力を伝え、もの知りの「町民先生」や「企業先生」などを交えて、次の世代を育てる、まさに世代循環型のまちづくりを実践している。わらすことおらほの南三陸には新しい未来がある。

③ 牧草、羊、花、命あるものと生きる

大船渡市のリグリーンは、その名のとおり、牧草やそれを食む羊たち、美しい花壇づくりを通じて、「リ（再生）」を目指している。命あるものにはゆっくりと丁寧に関わり、毎日を疎かにできない。そのなかで、美しい自然や次の世代が育まれる。

これからのまちづくりは、決して急がないこと。でも、毎日の繰り返しと継続の中で、新しい命や美しい自然が生まれ、それが穏やかに循環する。「まちづくり、終日のたり、のたりかな」である。





19回目

市民リレー

# 東北の元気

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。



今回は・・・

## ちぎり絵サークル

◎宮城県石巻市



作品を手に微笑むメンバーたち



教え合いながら和気あいあいと制作に励む



展示会にはたくさんの人が足を運んだ

2013年5月10日、11日の2日間、宮城県石巻市にある開成ささえあい拠点センターにて、ちぎり絵の作品展が開催された。作品をつくったのは、石巻市開成仮設住宅に暮らす女性たちで結成したちぎり絵サークルのメンバーたち。展示会をするのは今回がはじめてだ。訪れた人たちは作品の前で足を止め、じっくりと鑑賞。「わあ、すごい!」「きれいだね」と、感嘆の声が漏れる。「和紙のはぎ方一つでがらりと作品の印象は変わります。それぞれ個性が出ていてとても素敵ですよ」。そう話すのは同サークルの講師を務める三浦寛衣<sup>ひろえ</sup>さん。サークルの発起者だ。

ちぎり絵サークルが始まったのは2012年3月。その頃はまだサークルとしてではなく、ボランティア団体の協力を受け、仮設住宅に暮らす住民の交流の一つとして開催されていた。ちぎり絵を行うのは皆はじめて。しかし、作品が仕上がっていくことへのワクワクする気持ちや完成したときの喜びの大きさ

に、すぐに夢中に。そうして、2013年1月にサークルを設立。毎月1回2時間で行われるちぎり絵制作では、談笑しながらも、作品に向かう日は真剣そのもの。家に帰ってから続きをつくることもあるそうで、それも楽しみの一つなのだという。5人だったメンバーも、今では8人に。サークルに加入していた友人から誘われ、参加することになった人もおり、「誘ってもらえて本当によかった。楽しみができたわ」と、うれしそうに笑みを浮かべる。

取材中、「大きい家に暮らせるようになったら、作品をどくと部屋に飾りたいと思うの。なんだか気持ちも明るくなりそうでしょう」と話してくれたメンバーも。

仲間づくりや楽しみみとして始まったちぎり絵制作。しかし今、メンバーたちにとってちぎり絵は、これからの暮らしを明るく照らす希望の一つになっていた。



菅



まちの仕組み

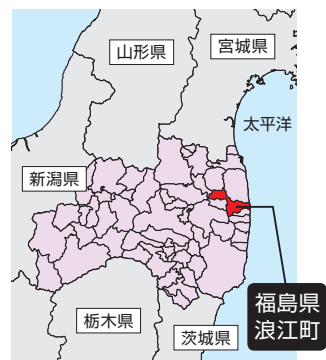
福島県浪江町

22

# 避難長期化で

## 「町外コミュニティ」整備へ

### 福島県浪江町



#### 原発避難で全国に住民分散

福島県浪江町は、東日本大震災の強い揺れと津波で死者182人、家屋全壊651戸などの被害を受け、原発事故に伴い町全域が避難指示の対象区域になった。全町避難が続き、仮設の役場庁舎を二本松市内に置く。町民は県内のみならず全国に散らばった。

復興に向け町は、中心市街地を含む、比較的低線量の避難指示解除準備区域を復興拠点エリアと位置づける。避難指示の解除が見込まれる2017年3月をメドに、防災集団移転や災害公営住宅の建設を進めていく構え。

ただ、2013年8月に町が世帯代表を対象に実施した意向調査では、避難指示解除後に町に「戻りたい」と回答したのは約19%に留まった。逆に「戻らない」

との回答は約38%に達した。地元関係者からは、「帰還する人は半分もいないのでは」といった声漏れる。帰還希望は若い世代ほど少ないという傾向も。

町の人口は1万9225人で、高齢化率28・9%。避難先に住民票を移すなどした人も含む「支援対象者」は2万1076人で、うち1万4634人が県内に、残りの6442人が県外で暮らす(3月末時点)。

仮設住宅は県内30か所に2893戸整備。入居は2204戸、4170人。県内の民間や公営の借り上げ住宅(みなし仮設住宅)は、3768戸で7837人が入居中(4月2日時点)。

避難先は、県内では福島市が3557人で最も多く、以下いわき市2462人、二本松市2386人、郡山市1711人、南相馬市1191人と続く。

県外は、和歌山県を除く全都道府県に避難者があり、最多は東京都の932人。以下茨城県930人、埼玉県743人、宮城県626人、千葉県574人など。

町は、生活インフラの整備などを進め帰還に備える一方、避難長期化を見越して町民が集中する南相馬市、いわき市、二本松市の3市に「町外コミュニティ」を整備する。2012年度策定の町復興計画(第一次)によると、町外コミュニティは、県が3市に建設

する復興公営住宅を中心に形成。役場出張所など町の行政機能を確保するほか、立地自治体とも協力して、医療、介護、学校などの生活関連サービスを提供する。

避難者には、「町に戻るか否か」だけでない選択肢が示された格好だが、復興公営住宅に入居するかどう

かも含め、その選択は人生を左右する難しい課題だ。

#### 復興住宅に「交流員」配置

支援する立場の行政や社会福祉協議会、民間団体などにとっても、復興が進むほど複雑化する状況にどう対処していくかは、頭の痛い問題と言える。

たとえば、4月に入居申し込みの受け付けが始まった町外の復興公営住宅での入居者に対する支援のあり方は、「他の市町村の避難者も入居するため、浪江町が単独で支援策を決めると不公平が生じる恐れがある。関係自治体などが話し合い、方針を固める必要がある」(町復興推進課)。こ

のため、町として明確な支援策は描けていない。



仮設住宅を戸別訪問する生活支援相談員(写真提供:浪江町社会福祉協議会)

一方、県は復興公営住宅の集会所に、100世帯に対し2人の割合で、仮設住宅の生活支援相談員のような「コミュニティ交流員」を配置することを計画。復興公営住宅の入居者だけでなく、その周辺に暮らす避難者もカバーし、入居者と

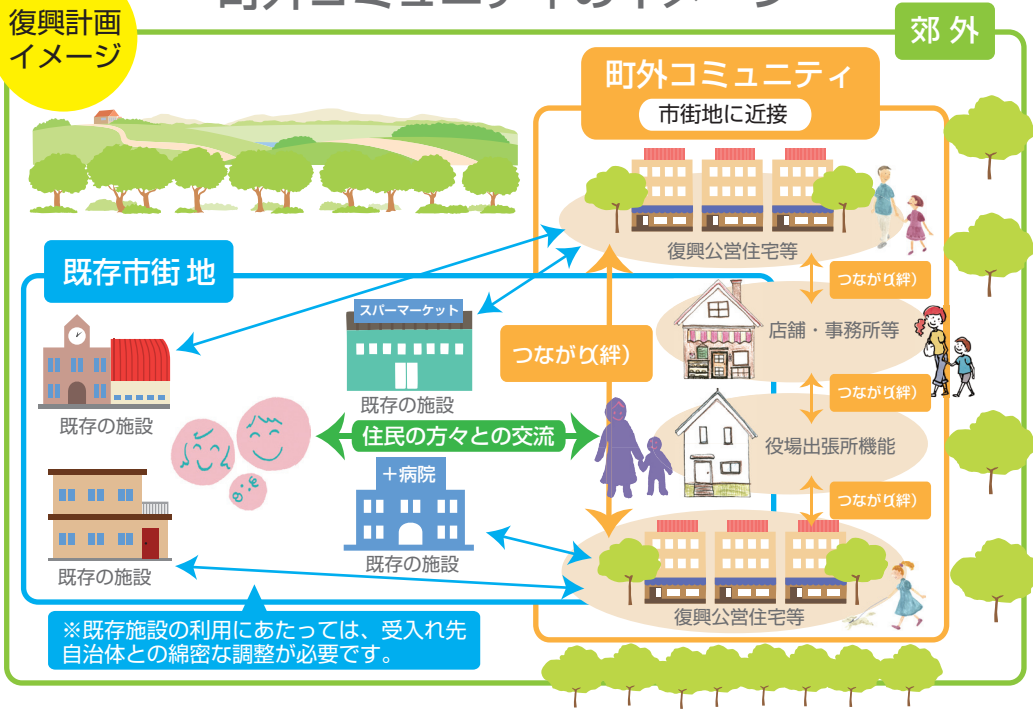
の集会所に、100世帯に対し2人の割合で、仮設住宅の生活支援相談員のような「コミュニティ交流員」を配置することを計画。復興公営住宅の入居者だけでなく、その周辺に暮らす避難者もカバーし、入居者と

※福島県内の被災自治体では、主に震災による津波などで家を失った人向けに整備する住宅を「災害公営住宅」、原発避難者向けに整備する住宅を「復興公営住宅」と呼んで区別しています。なお、復興公営住宅も制度上の正式名称は「災害公営住宅」ですが、福島県では復興公営住宅という呼称が定着しています。



## 町外コミュニティのイメージ

復興計画  
イメージ



南相馬市、いわき市、二本松市に整備する「町外コミュニティ」のイメージ図。  
受け入れ地域の住民との交流も重視している

受け入れ地域の住民との交流支援も役割として想定されている。交流員配置は委託事業となる見通しだが、委託先や業務範囲など具体的な枠組みは未定（6月27日現在）。県被災地域復興局生活拠点課は、「関係機

関との協議や検討作業を行っている。制度の仕組みを早急に取りまとめたい」としている。  
今後の支援のあり方を検討するうえで、現在の支援体制を顧慮する必要があるだろう。現在、避難者支

援の主軸を担っているのは町と町社協、それに県の委託を受けてサポートセンターを運営する民間の2団体。

町は、生活支援課が避難者支援の総合窓口機能を担う。二本松市の仮設役場のほか、福島市、本宮市、いわき市、南相馬市、桑折町の県内5か所に出張所を置いている。同課を中心に、復興推進課、健康保健課、介護福祉課、地域包括支援センター（町直営）など各課が連携しながら、町民の支援ニーズに対応する。具体的には、広報紙やホームページなどでの情報提供、健康相談・内部被ばく検査、交流会やスポーツ大会の開催などを行う。仮設住宅の設置当初は、自治会の立ち上げも支援した。

また、町は県外避難者のために復興支援員を配置している。今年度は、宮城、山形、茨城、千葉、埼玉、群馬、神奈川、静岡、京都、福岡の10府県に2〜4人ずつ計31人を配置。見守りなどを行って、福祉や介護のサービスが必要になった場合は、町が避難先の自治体や社協に対応を要請する。

### 将来見据え地道に努力

町社協は、戸別訪問による見守りなどを行う生活支援相談員を、統括役4人も含め計17人配置している。高齢独居など支援ニーズが高い世帯は週1回以上訪問し、安否確認や傾聴などを行う。不安のない世帯も少なくとも2か月に1度巡回する。見守りは仮設住宅が中心だが、徐々に借り上げ住宅にも範囲を拡げている。軽体操などの健康づくりや交流サロンの企画・運営も手がける。

復興公営住宅への転居後については、相談員統括チーフの池崎悟さんは、「入居予定を把握するよう努め、移った先でも支援を継続し、コミュニティの再生をお手伝いしたい」と語る。サポートセンターの運営は、ともに震災前から町内で介護事業を行っていた特定非営利活動法人Jin（ジン）と、社会福祉法人博文会が担当。Jinは二本松市、本宮市、福島市の3か所、博文会は二本松市、桑折町の2か所。二本松市ではそれぞれ別の仮設団地

でセンターを運営している。業務内容は、介護保険および介護保険外のデイサービスを中心としながら、学童保育、乳幼児一時預かり、各種体操教室、各種交流サロンやイベントの企画・運営など多岐にわたる。

このうち、Jinの交流サロンは、現在10種類以上。企画段階から参加者が関与し、カラオケや飲み会など、男性の参加者が大半を占めるものもある。

今年度の事業について、代表の川村博さんは、「避難者だけの集まりは原則として廃止していく。避難者と避難先の地域住民が交流できる場を整えたい」との方針を打ち出した。第1弾として福島市、二本松市、本宮市に計約4ヘクタールの農地を確保。「本格的な野菜づくりを交流媒体とし、避難者と地域住民に親交を深めてもらう」と意気込む。  
地震、津波、そして原発事故という過去に例のない複合災害に見舞われた町の、再生に向けた取り組みはこれから本番。地道な努力の積み重ねは、いつか必ず実を結ぶはずだ。木



# 支援員のための 地域生活支援

## 「困った」ときのQ&A ①

### 近隣トラブル

## 身体が臭う女性に 近隣から苦情

Fさん（22歳女性）は、祖父母と3人暮らし。お風呂に入っていないようで、臭うし、話しかけても無表情で反応がないと、近隣からの連絡で訪問をしました。

Q

訪問すると、Fさんは、ほとんど部屋のなかでゲームをして過ごしていると聞きます。祖父母もほとんど外出はしないようです。近隣との交流、また、なんらかの自立を促したいと思いますが、どうしたらよいでしょうか。

A

Fさんだけでなく祖父母の様子について、近隣の人から情報が入る関係を支援員が育んできたことがわかります。さて、Fさんですが、一緒に暮らしている祖父母が、Fさんに対して適切にかかわりをしていないことがわかります。Fさんは、祖父母が手伝いをしないと、生

活面で支障を来たず状況なのかもしれないですね。特に、入浴などの清潔の保持については、祖父母もFさんに衣類の交換を含めた清潔を促したり、入浴の習慣を身につけさせる、入浴環境を整えるなどが十分できているとは言えません。訪問を拒否しないということは、積極的か消極的かは別にし

て、支援員を受け入れてくれることを指します。「お風呂すら入れない・入らない人」ととらえると、簡単なこともできない人になってしまいますので、少しとらえ方を変えてみましょう。

まず、これまでどんなふうに住生活していたか聞いてみましょう。Fさんが自分でできていたこと、手伝えばできていたことなどが見えてくるでしょう。また、祖父母にも、今までやれていたこと、楽しんでいたことを聞いてみましょう。そうすることで、祖父母が何もしない人ではないことがわかります。そのうえで、どのように手伝えれば今の生活に近くなるのか、本人の思いを聞いてみましょう。もしかすると、そんなふうに関わられたことがなかったかもしれません。このようなかかわりから信頼関係が育っていきます。

### ヒントになる キーワード

◎信頼関係が生まれるようにかかわろう（支援は、信頼関係が生まれるようなかかわりから始まる）

◎寄り添う姿勢と広い視野をもとう（支援の基本は、寄り添う姿勢と広い視野）

◎ひるまず、出しゃばらず、相手の歩調に合わせてよう（支援者は、要保護者との関係をひるまない、出しゃばらず、歩調を合わせるができる）



# 仮設住宅と周辺地域との 交流活動

ヒントになる  
キーワード

**Q** 仮設住宅のある地区は、津波被害がなかったため、地域住民と仮設住宅住民との間に温度差があり、交流するという雰囲気になりません。集会所も周辺地区にあるため、仮設住宅住民は使いくいと言います。また、自治会も仮設住宅独自のものではないため、イベントなどはボランティア頼りになってしまいました。このような状況のなか、仮設住宅の住民がもう少し主体的に活動するには、どうしたらよいでしょうか。

**A** 仮設住宅や災害公営住宅は、地域住民が求めて建設したものではありませんし、一方の被災者も、自宅で暮らせないためにやむなく生活を送っているという事情があります。同じ地域で物理的に居住していることだけでは、同じ地域の住民として生活していることにはなりません。

課題に取り組んだりすることとがポイントの一つです。イベントを企画し、ボランティアに協力してもらう際、すべてボランティアがやってしまうと、地域住民はただの参加者になってしまい、イベントも根つきません。地域住民が共通に抱える課題、たとえば生活上の不自由さや高齢化の問題などについて、被災者も地域住民とともに、一緒に考えたり、アイデアを出せる

ような機会を徐々につくるのがたいせつです。町内会や民生児童委員など、地域の状況をよく理解している人たちの協力を得ることも重要です。仮設住宅や災害公営住宅に集会所などがあれば、場所を開放して、一緒に活動を楽しむ機会もつくり出せます。自然な活動のなかで互いを理解し合い、折り合いをつけながら地域でともに暮らせるように支援する視点が求められています。

◎ 地域は資源の宝庫ととらえ、地域をよく知ろう（支援者は、地域が資源の宝庫であるところとらえ、担当地域を知り、地域とつながり、地域づくりができる）

◎ 築きあげた信頼関係を資源として活用しよう（支援者は、築きあげた信頼関係を資源として生かすことができる）

◎ 相手（要援護者）が折り合いをつけられるように支援しよう（支援者は、相互の違いを理解したうえで、折り合いをつけられるよう支援することができる）

## 東日本大震災・地域生活支援「困った」ときのQ&A

監修：大坂 純（仙台北百合女子大学教授） 発行：全国コミュニティライフサポートセンター

長引く仮設住宅暮らしは、住民同士の支え合いを生む一方、閉じこもりや孤立、アルコール依存、精神障害などの問題も引き起こしています。自立再建や災害公営住宅への転居が増えるにつれ、仮設住宅に残る人への配慮も課題になってきます。災害公営住宅など移転先では、コミュニティ形成支援が求められます。

複雑さを増す被災者支援の一助として、実際にあったエピソードから典型的な50の事例を抽出、対処法をQ&A方式で解説する『東日本大震災・地域生活支援「困った」ときのQ&A』を作成しました（平成25年度宮城県震災復興担い手NPO等支援事業）。対処法は東日本大震災だけでなく阪神・淡路大震災の支援関係者の協力も得て構成しました。今号から随時、その内容を抜粋し紹介していきます。

全文はHPで公開中 [http://www.clc-japan.com/research/2013\\_03.html](http://www.clc-japan.com/research/2013_03.html)







# 地域で信頼の共有を

東京大学 社会科学研究所 教授

玄田 有史



「津波でんでんこ」という言葉がある。でんでんこの「でんでん」は「手に手に」から変化したもので「めいめいで」を意味している。釜石復興まちづくり基本計画には「津波のときには、自分の命は自分で守るという意識で家族がばらばらになっても逃げることを優先する教え」とある。

震災当時、釜石市役所の防災課長だった佐々木守さんは震災後、全国で防災に関する講演を依頼されてきた。震災で各地からいただいた支援への感謝に加え、多くの命を守る事ができなかった自責と悔いを佐々木さんは率直に話す。「津波が来たら、とにかく逃げる事。それしかないんです」。

津波でんでんこの話を聞けば、津波の際には他人を顧みず、自分を最優先して逃げる事だと、だけれどが理解する。しかし過去の津波経験は「でんでんこ」がいかに難しいかを物語る。

午後3時の津波警報。海沿いの家にいる足が悪い親が心配だ。妻は学校に子どもを迎えに行かなければならない。夫婦は家と学校に車を急がせる。ただ海沿いも学校周辺も迎えを急ぐ車が渋滞し、どうにも動けない。そこに大津波が押し寄せ、多くをのみ込んでいった。

でんでんこ、なんて簡単にはできないのだ。だれでも何をさておき家族を心配する。自分を最優先など、考えられない。簡単でないから「津波でんでんこ」に祈りを込めるのだ。

どうすれば、家族のことを案じながらも、自分の命をまず守るという決心や行動ができるのか。キーワードは日ごろからの「信頼づくり」である。保護者と学校は日頃から地震や津波が来たときの避難や防災についてよく話し合う。危険が迫ったときには、お互いがどうすればよいか、とことん確認しておく。子どもも親に「迎えに来ないで。来たら危ない」と伝える。親は「学校の先生を信頼して大丈夫。まずは自分の命を守るんだ。迎えにいった津波に巻き込まれたら、何より子どもが悲しむ」と決意する。そんな信頼がない限り、命は守れない。

同じことは住まいのある地域にも及ぶ。地域のどこに足の悪い年寄りがいるか、住民のほとんどがわかっている。何かのときには、誰がその年寄りを連れて逃げるかも決めてある。「助け合って逃げる体制が町内会にはある。町内の仲間を信頼しよう。だから今は自分の命を守るんだ」。多くが信頼を共有する地域では、被害を最小限に食い止められる。

自分と周りの人びとの命を守り、地域の希望をつなぐには、日ごろからの信頼関係を創る地道な取り組み

## ●プロフィール

げんだ・ゆうじ=東大経済学部卒、ハーバード、オックスフォード両大の客員研究員、学習院大経済学部教授などを経て、2007年より現職。専門は労働経済学。2005年より「希望」を社会科学的に研究する希望学を提唱。岩手県釜石市や福井県などで地域調査を行ってきた。著書に『希望のつくり方』(岩波新書)、『孤立無業』(日本経済新聞出版社)ほか。岩手県東日本大震災津波からの復興にかかる専門委員、釜石市復興まちづくり委員会アドバイザーを務める。



が欠かせない。次の大きな地震や津波が襲う前に、日本中の地域がどれだけ信頼を共有できているだろうか。



宮城県サポートセンター支援事務所

〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3-7-4 宮城県社会福祉会館3階  
TEL 022-217-1617 FAX 022-217-1601

## サポートセンター行脚 —ある社協マン①—

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

私の原稿は、格調高い浜上章さんの文章（下部）と比べて「生臭い」話を中心に恐縮です。今回は、サポートセンターを運営している、とある市町の社協マンを紹介します。

その人とは、もう10年来の付き合いですが、地域の住民と近い距離感で、かつ住民と丁々発止でやり取りする姿に、こんな社協マンがいたのか、という想いでした。

NHKドラマ「サイレントプア」の深田恭子さんのようなソフトな社協ウーマンとは異なり、街のお節介親爺そのものの風貌と態度は、私が抱く古典的な社協マンのイメージですが、こんな好漢親爺、いなくなりましたネ。

震災前、障害者の生活支援に協働であたりましたが、組織を超えて支援の枠組みを拡げていく「力」に迫力を感じました。

コーディネート力の確かさとワーカーとしての想いに共感しました。

当事者にとって身近な支援者としての立ち位置は、ときに親爺的、ときに兄貴的存在で、変幻自在。怒る時の迫力たるや。さすがの私も及び腰、第三者が見ると「差別だ！」と訴えるかもしれないほどのものでした。

対人援助において、利用者の想いに寄り添うという基本姿勢に囚われすぎる昨今、顔色を伺うような「薄っぺらい」関係での支援が目立つこの頃、この出会いは衝撃でした。

地域の人びとと向き合い、日常的に関わる際には、人としての「個性」が支援する側にも問われると思っています。(続く)

## 平成26年度 宮城県被災者支援従事者研修

### 分野別研修

- 【石巻会場①】7月29日(火) 石巻市支えあい総括センター
- 【仙台会場】7月30日(水) 岩沼市総合福祉センター
- 【石巻会場②】8月19日(火) 石巻市支えあい総括センター
- 【気仙沼会場】8月20日(水) 気仙沼保健福祉事務所

### カリキュラム

- ①地域で活動している住民や団体との情報交換会
- ②認知症の人への理解と安心して暮らせる地域づくり
- ③生活困窮者(世帯)のおかれている状況と自立支援プログラム

### 事例研究会

～効果的な支援のためのネットワークづくりと支援アプローチの理解～

【仙台会場】7月31日(木) 仙台市戦災復興記念館

### ステップアップ研修

【仙台会場】8月21日(木)・22日(金) 戦災復興記念館  
お問い合わせ先 TEL 022-727-8730 (担当/伊藤、永坂)

# ひとりごと

## 生きがい・役割づくり支援の重要性

ある町の災害公営住宅で、何人もの高齢者が何もすることなく、ぼ～としてベンチに座っている情景が胸に焼き付いて離れません。ほかの市町でも似たようなことが起こる可能性があります。支援側の視点・関心はどうしても要支援者に限定しがちですが、今元気づうにしても、孤立している人や何もすることの無い人は、生活不活発病や認知症、孤立死につながりやすいということを忘れてはならないと思います。

阪神・淡路大震災の復興公営住宅で孤立死が頻発した背景には、病気や貧困、そして人とのつながりの無さと、生きがい・役割喪失が大きいと感じています。

人間、「誰かとつながっている」「誰かの役に立っている」という実感が、生きる力、希望になります。人それぞれに人生経験のなかで培ってきた特技や専門知識、得意なことが必ずあると思います。「何もない、

サポーターのあなたへ！

宮城県サポートセンター支援事務所  
アドバイザー 浜上章



何もできない」という人でも、身体が動けてより良く生きたいという思いさえあれば何かでき、団地や地域で役に立てることが見つかるのではないのでしょうか？

当初から高齢化率の高い災害公営住宅での見守り活動やサロンの開催は、お世話する人やボランティアがなかなか見つからないことも想定されます。高齢者イコール「支援を受ける人」と見るのではなく、「何かができる人、より良く生きようとしている人」ととらえれば、その人たちも地域のたいせつな活動主体、地域資源ではないのでしょうか？たとえば、高齢者自らが、同じ団地の同じフロアだけでも一人暮らしの人へ声掛け訪問をするなど、です。「生きがい・役割づくり支援」を「住民主体の支え合い活動」とつなげて考えるなか、これからの支援の重要なヒントがありそうです。



「亙理ささえあいセンターほっと」の生活支援相談員の皆さん

## 支援員を「卒業」した若者が福祉の道に



亙理ささえあいセンターほっと（宮城県亙理町）

宮城県亙理町の仮設住宅で、戸別訪問による見守りやサロンの企画・運営などを行う生活支援相談員（以下「支援員」）は7人。町社会福祉協議会が震災後開設した『亙理ささえあいセンターほっと』に所属し、統括役の復興支援コーディネーター3人とともに、借り上げ賃貸住宅（みなし仮設住宅）の住民や自主再建者も含め、被災者の生活支援を続けている。

ほっとの開所は2011年9月。当時は7人のうち6人までが、全国から町にやってきたボランティアの若者たち。あえて地元住民を雇用するのは避けた。

「被災者が被災者を支援するのは、当時の状況からして無理があると考えました」と、コーディネーターの佐藤寛子さん。「支援員として、何をすればいいかわからない状況で、元々ボランティアとして来ていた彼らは、とても積極果敢に『あれをやろう』『これもやってみよう』と試行錯誤を繰り返して支援の方向性を見出していきました。住民の信頼を得ることもできました」と振り返る。

当時のメンバーは、このほどコーディネーターとして町社協に正規雇用された1人を除き、今年3月までに全員退職した。「仕事が嫌になって辞めたわけではなく、支援員をするな

かで、それぞれ進むべき道を見つけたんです」（佐藤さん）。退職というより、いわば支援員を「卒業」した。高齢者向けのグループホームやデイサービス、社協のヘルパーなど、福祉分野に転職した人が多い。しかも、復興支援コーディネーターになった1人を加えれば、4人が町に留まっている。

支援員としての経験は、彼らの人生の宝となったに違いない。そして、町は貴重な人材を得た。

現在、支援員は6人が地元住民、1人が福島県からの避難者で、全員被災者だ。「震災から3年が経ち、被災者が支援員として働くにはちょうどいい時期だと思います。それに、今は積極果敢さより、むしろ細やかな気遣いが必要です」（同）。

近く災害公営住宅が町内に100戸あまり完成し、入居が始まる。ほっとでは、高齢・障害者など生活弱者に対する支援を、災害公営住宅でも継続する方向で検討中。将来的には、支援を地域全体に広げることも視野に入れている。木

**DATA** 亙理町社会福祉協議会・亙理ささえあいセンター「ほっと」  
〒989-2351 宮城県亙理町字旧館60-7  
TEL 0223-36-7559

### 購読者を募集しています！

「月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか？  
お知り合いの方へのプレゼントにもご利用ください。

●購読会員 年3,696円（年12回、送料込み）

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

<お振込先> ●ゆうちょ銀行振替口座

口座番号：02260-9-46303

加入者名：全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、①お届け先の住所と②何号からの購読申込みか、支援会員の方は③希望する送付先のあて名、または④「指定なし」と記入してください。

### お知らせ

平成26年度 岩手県高齢者等サポート拠点職員等研修  
分野別研修Ⅱ

「認知症の人への理解と安心して暮らせる地域づくり」

「生活困窮者（世帯）のおかれている状況と自立支援プログラム」

【宮古会場】8月26日（火）宮古地区合同庁舎

【釜石会場】8月27日（水）岩手大学三陸復興推進機構釜石サテライト

お問い合わせ先 TEL 022-727-8730（担当／伊藤、永坂）

### ☆次号予告 特集「『食』でつなぐ地域コミュニティ」

#### 読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ（地域づくり）から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

22号を読んで…

・図書館で見つけて手に取りました。被災地でのコミュニティづくりや地域福祉について、いろいろな取り組みがとてもわかりやすく出ていますね。登場する団体や個人の皆さんの生き生きとした様子も印象的です。職場の同僚やサークルの仲間にも教えたいと思います。（大崎市・Mさん）

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください！

TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737

E-mail joho@clc-japan.com

#### 編集後記

今号からスタートした「支援員のための地域生活支援『困った』ときのQ&A」連載は、CLCが発行した同名の冊子に基づいています。この冊子は大変好評をいただき、今後大いに活用されそうです。「東日本大震災」と銘打っていますが、被災地以外でもお役に立つ内容が満載。オススメです。（木村）